

昔むかし、山のなかの小さな村に、ひとりの娘が、お母さんと弟と三人で暮らしていました。お母さんは、毎日、朝早くから夕方まで、畑に出て働きました。

家のうらの崖に、まっくらなほらあながあって、そこに、鬼がすんでいました。娘と弟は、お母さんが出かけるとすぐに戸をしっかり閉めて、留守番をしました。

お母さんは、帰ってくると、いつも、トントンチャン、トントンチャンと、戸をたたいていいました。

「娘や、息子や、戸を開けてちょうだい。お母さんが帰って来たよ」

娘と弟は、お母さんが帰って来たとは分かったと、大よろこびで戸を開けました。

ある年の夏のことです。お母さんは、娘に、

「畑のとうもろこしがよく実ってきたから、行って、鳥に食べられないように見張ってくるよ。おまえは、弟としっかり留守番をしておくれ。夕方、帰ってきたらご飯にするからね」といって、畑に出かけて行きました。

お日さまが西にしずむころ、お母さんは、仕事を終えて、とうもろこし畑から帰って来ました。すると、道のとちゆうで、鬼ばばが出て来て、お母さんをつかまえてかみ殺してしまいました。

娘と弟は、いくら待ってもお母さんが帰って来ないので、探しに行くことにしました。

ふたりは、歩きながら、

「お母さん、早く帰って来て。早く帰ってご飯をつくってちょうだい」とさげびました。すると、遠くから、返事が聞こえてきました。

「ちよつと待っていてね。お母さんはすぐに帰るから」

娘は、この声は、どうもお母さんとはちがうと思いました。そこで、弟を引っぱって一目散に家にかけて帰りました。そして、がらがらと戸を閉めました。

じきに、戸の外から声がしました。トントンチャン、トントンチャン。

「娘や、息子や、早く戸を開けておくれ。お母さんが帰って来たよ」

娘は、

「あなたの声は、お母さんには似てないわ。もしあなたがお母さんなら、手をさわらせてちょうだい」といいました。

鬼ばばは、戸のすきまから、毛むくじやらの手を差し出しました。娘は、暗がりの中

で、その手をなでて、

「あんたは、お母さんじゃない。お母さんの手はすべすべして毛なんかいいわ。それに、お母さんは、玉の腕輪と銀の指輪をはめてるわ」といいました。

鬼ばばは、ひとすじの煙になって、とうもろこし畑にとって返し、お母さんのつけていた玉の腕輪と銀の指輪をはめてもどって来ました。そして、トントンチャン、トントンチャンと、戸をたたいて、

「娘や、息子や、早く戸を開けておくれ。お母さんが帰って来たよ」といいました。娘は、

「あんたの声は、お母さんには似てないわ。もしあんたがお母さんなら、手をさわらせてちょうだい」といいました。鬼ばばは、戸のすき間から手を差し出しました。すると、お母さんの腕輪と指輪がさわったので、弟が、大よろこびで、

「お母さんだ。早く戸を開けてあげよう」といいました。けれども娘は、

「あんたが、お母さんなら、あんたの足をさわらせてちょうだい」といいました。鬼ばばは、戸のすき間から、毛むくじやらの足をつっこみました。娘は、

「あんたは、お母さんじゃない。お母さんの足はすべすべして毛なんかいいわ。それに、お母さんは、白い靴下と刺しゅうした靴をはいているわ」といいました。

鬼ばばは、また、ひとすじの煙になって、とうもろこし畑にとって返し、お母さんのはいていた靴下と靴をはいてもどって来ました。そして、トントンチャン、トントンチャンと、戸をたたいて、

「娘や、息子や、早く戸を開けておくれ。お母さんが帰って来たよ」といいました。娘は、

「あんたが、お母さんなら、あんたの足をさわらせてちょうだい」といいました。鬼ばばが足をつっこむと、白い靴下と刺しゅうの靴がさわったので、ふたりは、お母さんだと思ひこんで戸を開けました。

鬼ばばは、家の中に入ってくると、

「かわいい子どもたち。今日はもうおせいから、ご飯はよみましょう。お腹が痛くなる困るから」といいました。そして、

「今夜は三人でいっしょに寝ましようね」といいました。娘は、

「わたしはいつもお母さんといっしょに寝てないわ。今夜もひとりで足もとで寝るわ」といいました。

「おまえひとりでこわくないの」

「ええ、こわくないわ」

鬼ばばは、しかたがないので、娘を足もとに寝かせて、自分は弟といっしょに寝ました。

娘がねむっていると、耳もとで、かりかりと犬が骨をかじっているような音が聞こえました。娘は、

「お母さん、お母さん、かりかりと何をかじってるの」とききました。

「いり豆を食べてるんだよ」と、鬼ばばが答えました。

「わたしにも、ひとつかみちようだい」

「だめだめ。おまえの歯は小さくて、食べられないよ」

娘が、弟が寝ているあたりを足でさぐってみると、冷たいものがぐにやっとさわりました。娘は、すぐに、弟が鬼ばばにかみ殺されたのだとわかりました。そこで、鬼ばばにいいました。

「お母さん、お母さん、おしっこがしたい」

「ベッドの足のおしっこでやり」

「だめだめ、地面の神さまにかけてしまう」

「戸のすみでやり」

「だめだめ、戸の神さまにかけてしまう」

鬼ばばは、腹をたてましたが、

「じゃあ、中庭でするといい。おまえの腕にひもを結んでおくから、もしこわくなったら引っぱるんだよ。すぐに助けてやるからね」といいました。

鬼ばばは、娘の腕にしっかりとひもを結びつけて中庭に行かせました。

娘は、中庭に行くと、腕のひもを小刀で切って、小犬の足に結びつけました。それから、家のうらの桃畑に走って行って、あまい桃がいっぱいになっている桃の木に、するするっと登りました。

鬼ばばは、いくら待っても娘がもどって来ないので、

「娘や娘、まだおしっこしてるのかい。早くもどっておいで」とどなりながら、ひもをひっぱりました。けれども、ひもをひと引きするたびに、小犬がキャンキャン鳴くだけです。鬼ばばは、もう待てなくなつて、ひとすじの煙になって飛び出して来ました。中庭から家のうらまでそこらじゅう探しましたが、娘は見つかりません。そのとき、雲が晴れて、月と星が、桃畑を明るくてらしました。鬼ばばは、桃の木の上に娘を見つけたま

した

「おまえ、そんな所にいたのかい」

娘はいいました。

「お母さん、この桃、ほんとにあまくておいしいわ。少し食べない？」

「じゃあ、わたしの前かけになげておくれ」

「前かけに落としたり、桃はつぶれてしまうわ。お母さん、口を開けて。口の中へ放つてあげる」

鬼ばばが大きな口を開けたので、娘は、その口めがけて小刀を投げつけました。小刀は命中して、鬼ばばは、ばったりたおれました。すると、鬼ばばの周りにとげのあるいらくさが生えてきて、桃の木の下にぼうぼうと広がりました。娘は木から下りることができません。

やがて、夜明けになると、向こうの山から商人がふたり歩いてくるのが見えました。ひとりには赤いじゅうたんを背負い、もうひとりは白いじゅうたんを背負っていました。娘はふたりに声をかけました。

「おじさん、おじさん。早く来て助けてちょうだい。木の下にとげとげのいらくさが生えてきて下りられないの」

商人たちは、桃の木の下まで来るとすぐにいらくさの上に赤いじゅうたんと白いじゅうたんを広げました。娘は、

「ありがとう。もし赤いじゅうたんの上に飛びおいたら、おじさんの娘になります。白いじゅうたんの上に飛びおいたら、おじさんの息子の嫁になります」といって、ぱつと飛びおりました。

娘は、赤いじゅうたんでも白いじゅうたんでもなく、かたわらの地面に落ちてしまいました。つま先が地面についたとたん、娘は一本のよもぎになっていました。

このときから、田んぼのあぜや畑の小道には、いらくさがはびこって、そばによもぎが生えるようになりました。道行く人が手や足をいらくさのとげにさされたときは、すぐによもぎをもんで傷にぬると治るそうです。

村上郁再話

資料『中国少数民族の昔話』李星華著／君島久子訳／三弥井書店